C-4

「ビールに行こう」？——移動の目的を明示する表現に関するチェコ語と日本語の対照

浅岡　健志朗

1.　はじめに

日本語で「祭りに行こう」はごく自然な表現だが、「*ビールに行こう」「*きのこに行こう」「*鹿に行こう」などは相当不自然である。一方、チェコ語[1]では、(1) のようにこれらに形式上対応する表現が自然なものとして容認される。(1b) を自然な日本語に翻訳するためには、「ビールを飲みに行こう」「きのこを採りに行こう」「鹿を狩りに行こう」のように、動詞によって具体的な行為を指定する必要があるだろう。このように具体的な行為を指定する表現は (2) のようにチェコ語にも存在する。以上から、(1) に示したチェコ語の「移動動詞 jít＋前置詞 na ＋名詞」構文（以下、「jít na N」構文）は、日本語の「Nに行く」構文と共通性を持ちつつも、異なる特徴を持っていることが分かる。

(1)　a.　Jdeme　na　festival.
go.1PL.PRS　for　festival.SG.ACC
「祭りに行こう」

b.　Jdeme　na　{pivo / houby / jeleny}.
go.1PL.PRS　for　{beer.SG / mushroom.PL / deer.PL}.ACC
「lit.｛ビール / きのこ / 鹿｝に行こう」

(2)　Jdeme　{se podívat na festival / si dát pivo / sbírat houby / lovit jeleny}.
go.1PL.PRS　{see the festival / drink beer / collect mushrooms / hunt deers}.
「｛祭りを観 / ビールを飲み / きのこを採り / 鹿を狩り｝に行こう」

本発表は、チェコ語の「jít na N」構文の特徴を、日本語の「Nに行く」構文との対照を通して多角的に検討することを目的とする。その過程で、(2) に示したチェコ語の「移動動詞 jít ＋不定詞句」構文（以下、「jít INF」構文）と、日本語の「V（動詞連用形）に行く」構文についても言及する。

2.　「jít na N」構文は移動とその目的を表す

(3a) は移動とその着点を表現し、(3b) は移動とその目的を表すと考えられる。ところで、前置詞 na には移動の着点を表す用法もある[2]。このため、(3b) はそもそも目的ではなく、(3a) と同様に着点を表している（つまり日本語の「〜のところに行く」に相当する）という可能性が疑われるかもしれない。しかし、この可能性は (4) によって否定される。

---

[1] 印欧語族スラヴ語派西スラヴ語群。基本語順はSVO。７つの格（主格、属格、与格、対格、呼格、前置格、造格）を持ち、主に情報構造に応じて柔軟に語順が入れ替わる。

[2] 移動の着点を表す前置詞として do と na のどちらが用いられるかは、着点の意味的特徴からある程度の一般化ができる（対象の内部への移動であれば do、上部への移動であれば na、など）。しかし、(i) に例示するように、このような一般化に当てはまらない例も多々ある。このような例に関しては、前置詞の補部となるそれぞれの名詞に関して、どちらの前置詞が用いられるかが記憶されていると考えるべきだろう。

(i)　a.　Pojedu　do　Česka.
go.1SG.FUT　to　Czech.SG.GEN
「私はチェコに行く」

b.　Pojedu　na　Slovensko.
go.1SG.FUT　to　Slovakia.SG.ACC
「私はスロヴァキアに行く」

(3) a. Jdeme do hospody.
go.1PL.PRS to pub.SG.GEN
「飲み屋に行こう」

b. Jdeme na pivo.
go.1PL.PRS for beer.SG.ACC
「ビールを飲みに行こう（lit.ビールに行こう）」

(4) a. Půjdu do hodpody, ale nebudu nic pít.
go.1SG.FUT to pub.SG.GEN but NEG.AUX.FUT.1SG nothing.ACC drink.INF
「飲み屋には行くが、何も飲むつもりはない」

b. ??Půjdu na pivo, ale nebudu nic pít.
go.1SG.TUT for beer.SG.ACC but NEG.AUX.FUT.1SG nothing.ACC drink.INF
「（lit.）ビールに行くが、何も飲むつもりはない」

c. *Já jdu sám na pivo, ale nebudu nic pít.
1SG go.1SG.PRS alone for beer.SG.ACC but NEG.AUX.FUT.1SG nothing.ACC drink.INF
「（lit.）一人でビールに行くが、何も飲むつもりはない」

(4a) の先行節が移動と着点を表しているなら、後続節の内容と何ら矛盾しない。例えば飲み屋に予約だけを取りに行く場合など、(4a) が自然な発話となる文脈はごく普通にある。一方、(4b-c) の先行節も同様に移動と着点を表しているならば、(4a) 同様、自然な表現となることが予想される（「ビールのあるところに行くが、何も飲まない」は特に矛盾しない）が、これらは不自然であると判断される。

ここで、ある主体が行為Aを実行するとき、**(I) 行為Bを実行する意図があり、かつ (II) 行為Bの実行が行為Aの実行によって可能になるという信念を持っている場合に、「行為Aは行為Bの手段であり、行為Bは行為Aの目的である」**と呼ぶことにしよう。例えば、太郎が移動するとき、(I) ビールを飲む意図があり、(II) 移動することによってビールを飲むことができると信じているなら、移動することはビールを飲むことの手段であり、ビールを飲むことは移動することの目的である。

これを踏まえて、(4b-c) の先行節が目的を表現していると仮定する。すると、定義上、行為A（＝手段：移動する）を実行する意図と行為B（＝目的：ビールを飲む）を実行する意図がともに表現されることになる。しかし、後続節で行為Bを実行する意図が否定される。これによって全体として矛盾した内容を表現することになり、(4b-c) は不自然な表現になる。以上から、(4b-c) の先行節、つまり「jít na N」構文に目的を表す用法があると考えるのは妥当である[3]。以下では、分析の対象を明確にするために、移動の目的を表現する事例のみを「jít na N」構文の事例として扱う。

同型の議論が「Nに行く」構文にも適用できる。(5) と (6) の容認性の違いは、(5) の先行節が移動と着点を表現しているのに対して、(6) の先行節が移動と目的を表現しているためである。つまり「Nに行く」構文にも、移動と着点を表現する用法と、移動と目的を表現する用法がある。以下、後者の事例のみを「Nに行く」構文の事例として扱う。

(5) a. バイト先に行くけどバイトはしないつもり。 b. 釣り堀に行くけど釣りはしないつもり。
(6) a. *バイトに行くけどバイトはしないつもり。 b. *釣りに行くけど釣りはしないつもり。

3. 「Nに関する行為を目的とする移動」を表現する

(3b) の事例における移動の目的は、ビールを飲むという行為として解釈される。しかし、飲むという行為は明示的に表現されていない。では、これ以外の行為が目的であると解釈される可能性はあるだ

[3] 着点から目的への意味変化は通言語的に観察される現象である（Heine＆Kuteva 2002）。

ろうか。ここで注目すべきなのは、(4b) の発話が「じゃあ何をするつもりなんだ？」という反問を誘発するという事実である。先行節が何らかの行為を行う意図を表現していると考えれば、この反問は自然なものだろう。つまり、先行節でビールに関して何らかの行為を行う意図が表現され、これは普通、ビールを飲む意図として解釈される。しかし、後続節で何も飲まないという意図が同時に表現されているために、先行節で表現されている意図の内容を確かめる必要が生じるのである。この反問に対して、例えば「一緒にいく他の皆はビールを飲むだろうが、僕は飲まずに座ってるつもりだ」という答えが返されれば、会話は問題なく成立する。この場合には、移動の目的は「ビールを飲む」という行為ではなく、「皆でビールを飲む会に参加する」のような行為として解釈されている。(4b) の不自然さは、先行節が普通、「ビールを飲む」意図を表現するものとして解釈されるという事実に起因するものと考えられる。一方で (4c) が (4b) に対してより不自然であるのは、ビールに関わる何らかの行為を一人で行う意図が表現されているために、上記の解釈すら不可能であることが要因であると考えられる。以上から、「jít N」構文は「Nに関する行為を目的とする移動」を表現する。「Nに行く」構文も同様に、「Nに関する行為を目的とする移動」を表現すると言える。例えば、(7) の容認性が低いことから、先行節は「学会に参加するという行為を目的とする移動」を表現していると考えられる。

(7)　??学会に行くけど、学会には参加しないつもり。

さて、上記の「Nに関する行為」とは、具体的にはどのような行為として解釈されるだろうか。ビールに関わる行為は、潜在的には無数にある（例：ビールを飲む、ビールを飲む会に参加する、ビールを売る、作る、冷やす、料理に使う、花壇に撒く、見つめる…）が、それぞれの行為が (3b) の解釈として選択される可能性は同等ではない。(4b) では明らかに、ある程度の可能な解釈の幅をもちつつ、優先される解釈（つまりビールを飲むという解釈）が存在する。何が優先される解釈になるかには、「ビール」に関する一般的な知識が関わっている。すなわち、「ビール」に関して論理的に可能な無数の行為のうち、現に可能な行為がどんなもので、典型的な行為とはどんなものか、という知識[4]である。ビールに関する典型的な行為が、「Nに関する行為」の解釈として優先される[5]。

4.　「jít na N」構文と「Nに行く」構文で、Nに現れる名詞はどのように異なるか

「jít na N」構文と「Nに行く」構文は、「Nに関する（典型的な）行為を目的とする移動」を表現する点で共通している。しかし、どのような名詞であってもNとして容認されるわけではない。両構文は、Nとしてどのようなタイプの名詞が現れうるかという点で異なる。

4.1.　出来事を表す名詞

(8) に例示するように、人間が意図的に成立させ、人間が意図的に参与するタイプの出来事を表す名詞は、「jít na N」構文と「Nに行く」構文の双方のNに生産的に現れる。しかし、相違点もある。日本語の「Nに行く」構文は、(9) のように、人間が意図的に成立させる出来事を表す名詞でない場合には容認されず、動詞によって行為を指定しなければならない。一方、チェコ語では、(10) に示すように、

---

[4] 「ビール」のプロトタイプを構成する知識（西村・野矢 2013）に含まれる行為、あるいは「ビール」という概念が開く典型的な物語（野矢 2011, 2016）に含まれる行為と言い換えてもよい。

[5] Nに関する典型的な行為にどのような行為が含まれるかは、Nを含む複数の言語表現において優先される解釈を観察することによって推定される。例えば、「ビールが好きだ」は「ビールを飲むことが好きだ」として解釈されるのが普通で、「ビールを冷やすのが好きだ」と解釈されるのは普通ではない。同様に、「ビールを控える」の解釈は「ビールを飲むことを控える」が普通で、「ビールを花壇に撒くことを控える」は普通ではない。

このような出来事であっても（例えば地震を体験すること、調査することが目的であることが文脈上明らかである場合は）「jít na N」構文によって表現することができる。

(8) Jdeme na {party / výlet / festival / ohňostroj / fotbal / box}.
go.1PL.PRS for {party / excursion / festival / fireworks / football / boxing}.SG.ACC
「パーティー / 遠足 / 祭り / 花火 / サッカー / ボクシングに行こう」

(9) （日本に）｛地震 / 土砂崩れ / 雪崩｝＊（を体験し）に行こう。

(10) Pojedeme do Japonska na zemětřesení.
go.1PL.PRS to Japan.SG.GEN for earthquake.SG.ACC
「日本に地震を｛体験しに行こう／調査しに行こう…etc｝」

4.2. 飲食物を表す名詞

「jít na N」構文では、Nに飲食物を表す名詞が生産的に現れる。(11-12) では、Nに具体的な飲食物を表す名詞が現れ、「Nを飲む / 食べるために移動する」という意味が表されている。これらの事例のように、Nが飲食物を表す名詞である場合、特に「Nの指示対象（以下、N）を飲食するために（それを提供する）飲食店に移動する」というのが普通の解釈となる。この解釈は、「jít na N」構文の慣習的な意味の一つと考えられる。その根拠は二点挙げられる。まず、(13) のように、Nの飲食を目的としていても、その目的のために飲食店ではない場所に移動する場合にはやや容認性が下がる。さらに、(11) に示すように、Nが mléko「牛乳」や voda「水」である場合には容認性が下がる。これは、これらを飲むことを目的として飲食店に移動するという状況が想定し難いためと考えられる。実際、例えば「（貴重で高品質な）牛乳や水を提供する専門店」が先行する文脈で提示されている場合には、これらの文の容認性が上がる。

一方、日本語の「Nに行こう」は、(14) のようにNに具体的な飲食物を表す名詞が入ると、多くの場合で不自然と判断される[6] [7]。自然な表現にするためには、動詞によって目的となる行為を指定する必要がある。ただし、(15) に示すように、具体的な飲食物ではなく「朝食」「昼食」「夕食」のような食事のタイプを表す名詞であれば、「Nに行く」構文のNに現れることができる。

(11) Jdeme na {pivo / kávu / čaj / víno / kolu / sodu / džus / ?mléko / ??vodu}.
go.1PL.PRS for {beer / coffee / tea / wine / cola/ soda / juice / milk / water}.SG.ACC
「ビール / コーヒー / お茶 / ワイン / コーラ / ソーダ / ジュース / 牛乳 / 水を飲みに行こう」

(12) Jdeme na {smažák / polívku / guláš}.
go.1PL.PRS for {fried cheese / soup / goulash}.SG.ACC
「チーズフライ / スープ / グラーシュを食べに行こう」

---

[6] 例えば「コーヒーに行きませんか」よりも「コーヒー行きませんか」のように、格助詞を伴わない形式の方がやや容認性が高くなるようである。

[7] 日本語でも、「焼き肉 / しゃぶしゃぶ / 寿司 / (?)お好み焼き / (?)鉄板焼き｝に行こう」のようにNが食べ物であっても容認される例がある。どのような食べ物であれば容認されるのかについては不明であるが、名詞の指示対象に出来事らしさがあるほど容認されやすくなるとは言えるかもしれない。ただ、「焼き肉をする」「しゃぶしゃぶをする」とは言えても「寿司をする」とは言えない（「生しらす丼でも行きません？」のように、「Nでも行く」という構文であれば具体的な飲食物でも容認される（石塚政行さんにご指摘頂いた））。これらの事例に関しても、上記のチェコ語の事例とは相違点がある。つまり、これらの事例は「Nを食べにいく」以外の解釈がほとんど不可能であるのに対して、「jít na N」構文は前述の通り、例えば「Nを売りに行く」のように、「Nを食べに行く」以外の解釈も可能である。

(13) ?Půjdu　　na　pivo　　ke　kamrádovi.
go.1PL.PRS　for　beer.SG.ACC　to　friend.SG.DAT
「友達の家にビールを飲みに行くんだ」を意図。

(14)　{??ビール / ??コーヒー / ??お茶 / *コーラ / *水} に行こう。

(15)　{朝食 / 昼食 / 夕食} に行こう。

4.3.　野生の動植物を表す名詞

(16) に例示するように、「jít na N」構文のNに狩猟や採集の対象となるような野生の動物や植物が現れることも多い。これらの事例に関しても、「主語がNを狩る / 採集するために（それが可能な）移動する」という解釈が優勢ではあるものの、主語とNの関係について他の解釈も可能である。例えば、(16) の3つ目の事例は、様々な種類の魚を市場などに売りにいく職業の人の発話であれば、「（今日は）コイを売りに行こう」という解釈が可能である。一方、これらの事例が表す事態は、日本語の「Nに行く」構文で表現することはできず、やはり目的となる行為を動詞によって指定する必要がある。

(16) Jdeme　　na　{jeleny /houby / kapry}.
go.1PL.PRS　for　{deer / mushroom / carp}.PL.ACC
「シカを狩りに行こう / キノコを採りに行こう / コイを釣りに行こう」

5.　移動を含意しない表現への文法化

「jít na N」構文に見られる文法化について指摘する。Nに代名詞 to「それ」が現れている事例 (17a) は、例えば位置を変えずにある作業から別の作業へ移行する意図を表明する文脈で自然な表現となることから分かるように、主語の指示対象の移動を含意しない点で、これまでに挙げた事例と異なる。ここでは、単に主語の指示対象の（何らかの行為を実行する）意図を表す表現への文法化が起こっていると言えるだろう。また、同様の文法化が動詞によって行為を指定する「jít INF」構文の事例 (17b) でも起こっている。これらは、日本語の「奮発して上カルビ行こう」などの表現に見られる文法化と平行的な現象と見ることができる。

(17) a.　Tak　jdeme　　na　to.
now　go.1PL.PRS　for　that.SG.ACC
「じゃあ（それを）やろう」

b.　Tak　jdeme　　to　　udělat.
now　go.1PL.PRS　that.SG.ACC　get done.INF
「じゃあ（それを）やろう」

6.　「移動とその目的」を特別な形式で表現する現象について

チェコ語の前置詞 na を主要部とする前置詞句が動詞を修飾し、行為の目的を表現する用法が可能なのは、おおむねその動詞が（本発表で扱った jít のように）移動動詞である場合に限られる。移動とその目的を表すために、行為の目的を表す他の構文とは異なる特別の形式を用いる現象は通言語的に観察される（塩原 2006）。例えば、日本語でも、「勉強しに（図書館に）行く」「勉強しに（図書館に）来た」などとは言えても「*勉強しに（図書館に）居座る」などと言えないように、「V_1（し）にV_2」という形式においてV_1が（V_2が表す行為の）目的を表すのは、V_2が「行く、来る、戻る、帰る、集まる、向かう」などの意図的な移動を表す動詞である場合に限られると言って良いだろう。

通言語的にこのような現象が見られる背景にはどのような要因があるのだろうか。これには、意図的な移動が、着点における何らかの行為を目的とするものであるのが普通であること、そして、ある行為（＝目的）を実行する手段として、ある着点に移動する必要がある場合があることが関わっていると考

えられる。移動と目的がこのように着点を介した仕方で結びついていることが、これらの概念を特別な形式で表現することを動機付けていると言えよう。より具体的には、「特別な形式」の成立には少なくとも次の二つの要因が関わっていると見ることができる。

(A) 着点を表す形式が目的を（も）表すようになる場合：移動の着点が表現されれば、移動の目的が同時に分かる場合がある。例えば「本屋に行く」「学校に行く」「トイレに行く」など、目的の行為を明示せずとも、着点となっている対象に関する「典型的な行為」についての知識（その場所で一般的に何が行われるかという知識）から目的が推測できる場合は多いだろう。このことが、例えば「Nに行く」という構文が（「学会に行く」のように）目的を表す場合のように、着点を表す形式が目的を（も）表すようになる変化を動機付けている。

(B) 移動動詞と目的の行為を表す形式が共起する場合：移動の着点が表現されなくとも、移動の目的を表現すれば、着点が分かる場合がある。例えば「ゴミを捨てに行く」「本を買いに行く」「釣りに行く」など、着点を明示せずとも、その行為が一般的にどのような場所で行われ（得）るものかという知識から着点が推測できる場合は多いだろう。つまり、移動は着点を要求するが、着点は目的によっても間接的に示されうる。このため、着点よりもむしろ目的が表現したい意味の中心である場合に、着点を表現せず目的だけを表現することが可能である。これが、移動と目的の行為を共に表す形式（例えば「Vに行く」構文や英語の *go swimming* のような表現など）の成立を動機付けている。

以上を踏まえると、jít na pivo「ビールに行く」に代表されるような「jít na N」構文の事例は、(A) (B) の両方の要因が関与することで成立したものと見ることができる。つまり、「jít na N」構文が目的を表す用法を持つという点では (A) の要因が関わっており、そして、移動動詞と目的の行為（ビールを飲む）を（その行為に参与する対象（ビール）によって間接的に）表す形式が共起するという点で (B) の要因が関わっている。

7. おわりに

チェコ語の「jít na N」構文と日本語の「Nに行く」構文は、「Nに関する行為を目的とした移動」を表現するという共通性を持つ。「jít na N」構文には (i)「出来事Nに参加するために（その出来事が催される場所へ）移動する」(ii)「具体的な飲食物Nを飲食するために（飲食店に）移動する」(iii)「野生の動植物Nを狩猟・採集するために（それが可能な場所へ）移動する」という少なくとも三つの慣習化した用法がある。一方、「Nに行く」構文は (i) におおむね対応する用法を持つものの、(ii) の用法は限定的であり、(iii) に対応する用法は皆無と言えそうである。

参考文献

Bratman, Michael. (1983). 'Taking Plans Seriously'. *Social Theory and Practice*.Vol. 9, No. 2/3, A Special Double Issue: RATIONAL ACTION (Summer-Fall 1983), pp. 271-287

Heine, Bernd., Kuteva Tania. (2002). *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

塩原朝子（2006）「スンバワ語の「移動とその目的」を表す動詞連続構文」

西村義樹・野矢茂樹（2013）『言語学の教室』中央公論新社.

野矢茂樹（2011）『語りえぬものを語る』講談社.

野矢茂樹（2016）『心という難問』講談社.